

中国語中級作文教育のためのアプリケーション設計

著者	大瀧 幸子, 陸 芸娜, 陳 会林
著者別表示	Otaki Sachiko
雑誌名	応用言語学研究論集
巻	4
ページ	99-104
発行年	2010-12-30
URL	http://hdl.handle.net/2297/39709

中国語中級作文教育のためのアプリケーション設計

— 基盤研究C課題番号 21520570

「誤用例の文脈分析に依拠した上級作文教材」中間報告

研究代表者 金沢大学文学部教授 大瀧幸子

研究協力者 人間社会環境研究科 陸芸娜、陳会林

概要

中国語教育において「初級の単語数1500から3000をマスターし、基礎的な単文の文型を用いた作文ができる」ところまで到達している習熟度を、本稿では**中級レベル**と呼ぶ。この中級レベルから上級に到達させるための作文教材は、学習者人数が少ないために商業ベースに乗りにくい。しかしながら、論文作成の準備、業務上の通信をはじめ、少数ながらも、「より優雅な表現」を習得する必要に迫られる人びとは確実に存在している。本稿で紹介する文体教育用アプリケーションは、フレーズよりも大きく複雑で通常の辞書には採録されない、語彙の常套的組み合わせ（「コロケーション」）を**文体差を意識させた作文教育**に組み込んで活用する方式を追及するものである。

1: はじめに

日本国内で市販されている初級作文教材は、文型ごとに解説と模範例をしめし、次に練習問題を置く形式のものがほとんどである。中級レベルの作文教材は管見の限り、手紙例文集がほとんどであり、文型についての解釈や個々の単語についての用法には触れられていない。また巻末ページも手紙のテーマに基づいたおおまかな意味を日本語を用いて検索させるものはあるが、一つの表現が異なるテーマ・場面でどのような意味の違いを生じているかを一望できる工夫まではいたっていない。

この2～3年、教える順序に配慮した文法教材やサイドリーダーも出版されるようになったが、中級レベルの認定基準についても、初級ほど議論の必要が喧伝されてはいない。作文指導の多くはまだ大学第二外国語用テキストのなかに練習問題として混在させられているのみである。筆者の教学経験によれば中級レベル（本稿概要の定義参照）に到達した学習者は、（1）中日辞典をひいて中国語の翻訳ができる（2）日中辞典をひいて単語を探し出し、基礎的文型にはめ込んで単文が作文できる。したがって、訳読中心となる現行の大学二年次の第二外国語教育においては、格別の工夫を加えた教材が用意されることなく、学習者はひたすら多読させられ「授業を受けつつ自習」することによってみずからレベルアップを図るのが現状といえよう。教師はもはや言語のトレーナーとしての役割を果たしてはいない。しかし、作文指導の時期と分量については、岩波新書『外国語学習の科学』（白井恭弘）においても、習得単語数の少ないうちから無理にアウトプットを強要すると、妙な癖がつくことを警戒するべきだ、という議論が展開されている。筆者も「留学を経ないままの外国語学習」をして今にいたる自らの学習経験や、第二外国語から中文へ進学してくる学生に対する教学経験から、作文指導は中級レベルから本腰を入れるべきだと考える。

2：中級レベル学習者と母語干渉

本科学研究では、「母語による干渉は初級レベルと上級レベルにおいて、それぞれ異なる原因により生じる」という仮説をたてている。

初級レベルでは「当該言語との接触量が少なく、言語表現に関する知識が不足する」ために、理解・表現ができない場合には「その文脈・場面でよく使われる母語」のなかから類似の表現を探して間に合わせようとするために誤用が生じると仮定する。このレベルでの誤用は、単文単位で意味不明の判定が可能となる。

上級レベルでは当該言語になれば、内言語として思考手段にも用いるようになってから、「学習者が母語で独自の論旨を通そうとする場合に使う表現法の癖」が投影されてくると仮定する。このレベルでは、個々の単文は文法的に成立するが、論旨を理解しようとすると意味不明になる言語現象があらわれるからである。

一方、この仮説では、中級レベルには母語干渉の例として誤用をピックアップする基準が設定されていない。すなわち、本稿では中級レベルを「履修対象とする言語を内言語に埋め込みつつ、母語でもなく対象言語でもない「中間言語」の使用者として過ごす過程」、いわゆる中間言語利用者としての代表的な時期とみなすのである。中間言語コーパスまたは学習者コーパス（誤用例コーパス）の最もよい情報提供者は中級レベルの学習者であることは言をまたない

（自由作文を分量的にもこなせる、作文課題も多岐にわたるだけの語彙量を有する）。しかるに、彼らの提供する誤用例は母語干渉という視点から分析を加えるには、あまりに複雑な原因によって引き起こされているため、母語干渉の様態を示す言語資料としては適材ではない。誤用の代表的2タイプ（1）初級レベルから出現する文法・語彙組み合わせ違反。（2）上級レベルでの文脈や場面とのミスマッチ（主に推論方法）が混在して出現し、個々の誤用が生じた原因の区別がつけ難いからである。すなわち、どこまでが思考用内言語としての母語からの干渉により、学習対象言語による思考の道筋を間違えたのか、どこまでが言語表現に関する知識不足により、強引な母語への引き寄せをしているのか、について、いまだ明確な判断基準がたてられていない。これまでの多くの教育現場での経験報告を通して、おそらく学習者の母語と学習対象言語の組み合わせにより異なる基準が必要になる、という予測は既に周知され受け入れられているが、「学習者の母語別学習教材」の開発は、まるで空理空論のごとく放置されてきたといっても過言ではない。したがって、この

判定基準を見出すこと自体が、中級レベルの誤用分析の重要な研究課題の一つといえる。今回の教材開発プランにおいても、母語干渉への対策をたてることは今後の課題とした。

また、認知言語学分野での第二言語習得理論においては、一對の言語表現をパラレルコーパスとして比較するだけでは母語干渉と判定する論拠としては不十分であると、3個以上の言語の母語話者を組み合わせた合計4種類以上の誤用例パラレルコーパスを比較検討することが提唱されている。本科学研究も中国語を軸として、日本語のほかにも英語を加えたパラレルコーパスの収集、すなわち日本人学習者と英語圏学習者の作文コーパス収集へと進む予定である。

3：中級レベルの作文教材が備えるべき条件

中級レベル学習者の作文を集めた中間言語コーパスの内容は、母語干渉の研究対象としては不適格な言語資料であっても、誤用分析のための言語資料としては、個人的な特徴を対象とするミクロな観点からの分析と、特定テーマに関する作文課題を書かせて課題ごとに現れる集団的な誤りを対象とするマクロな視点からの分析を行うには良質な研究対象である。

今年度の達成目標とした教材開発では、中級レベルの学習者に対して、上級レベルにおいて出現する母語からの干渉（主要原因は類推の間違いと仮定）を排斥するためのツールを用意することを試みた。具体的なプランとして、手紙文例文に対して以下の3点の学習用ツールを用意した。

- (1) 同一テーマの文脈に多用されるコロケーションリスト
- (2) 同一内容を表す文体別表現の並列表示
- (3) 想定する読者の違いによる同一テーマ内の話題差

以下、具体的なアプリケーション設計を図1～図2に示す。上記の学習ツールを検索用として作成するために、<図2>の本文例に

は、(1) 常套句、(2) ほぼ同じ内容の表現差、(3) 話題の出し方の差 の三種類の比較方法が、該当箇所の色づけしてリンクしてある。

<図1>



<図2> 三種類の文体区別例

口語表現：AC 同学：你好！

这次去东京旅行，能认识你，我们真的很高兴！

標準書面語：BC 同学：你好！

去东京旅行时，能够认识你，我们非常高兴！

文語調表現：CC 先生：您好！

日前赴东京旅游，有幸与您相识，万分高兴！

これらの作文指導用の学習ツールを備えた作文教材は、中級レベルの学習者に、次の学習効果を獲得させることを意図している。

(1) 文体差を敏感に意識させ、文体の混在をふせぐ。

外国語学習が口語と音声言語からはじまるのは正道であるが、日常会話に不自由なくなつたあとには、文章を書くにあたって、日常会話用語と書面語を区別するという課題を与えるべきである。

意味は通じて、文章としては格が低く、正式な論文や公式の挨拶文としては使えない、という作文レベルを脱却させる必要がある。学習者の自習に任せていては、このレベルアップは遅々として進まない。例えば、日本語で学位論文を書こうとするほどの日本語コミュニケーション能力をもっている留学生であっても、逆接の接続詞として「しかし（ながら）」ではなく「だけど」「けれども」を使ってしまうような事例は枚挙の暇がない。また、中級から上級のレベルでは、中国語においても語彙の組み合わせやコロケーションによって文体が区別されると同時に、実は対偶表現としての丁寧体も敬語表現も存在している、と指導せねばならない。このアプリケーション設計は、学習者に初級段階で刷り込まれた対偶表現はない、という意識を排除し、新しい中国語文章観を確立させる目的をもつ。

(2) 文章の話題に適した語彙やコロケーションを使う。

中国語の場合は「話題のたてかた」やそれに合致した語彙を仕様することで対偶表現が成立している。例えば返信時に、「知道」「听说」「得知」「获悉」など主動詞の文体差にあった、伝聞内容のコロケーションを構成する必要がある。さらに中級レベルではさらに、主動詞が直接的に伝聞内容と結びつく「惊悉」「欣悉」などの表現を習得させる必要がある。漢字一文字が形態素としての意味をもち、造語能力を発揮した表現は、文法に基づいた和文中訳や、構文内の語彙入れ替えという、初級の作文学習方式では習得できない。したがって、このアプリケーション設計は語彙とコロケーションの検索一覧表において使用頻度とは別の観点から、関連表現をまとめて習得させる目的をもつ。

以上、簡単ですが、課題研究の中間報告といたします。
皆様から叱正とご教示を賜りますよう、お願い申し上げます。